様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２９００

研究課題名（和文）海外で日本語を学ぶ子どもの日本語能力の把握と教材研究

研究課題名（英文）Research on langauage competence of chidlren who learn Japanese oveseas and teaching material development

研究代表者
川上　郁雄（Kawakami, Ikuo）

早稲田大学・国際学術院（日本語教育研究科）・教授

研究者番号：３０２５０８６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本国外において幼少期より複数言語環境で日本語を学ぶ子どもたちの日本語能力も含む複言語複文化能力を把握するために、当事者である子ども、そして幼少期より複数言語環境で成長した体験を持つ大人が自らの体験や複言語複文化能力をどのように意味づけて経験として記憶し生きてきたのか、また生きているのかについて調査を行った。この調査によって得られたデータは「移動する子ども」という分析概念により分析された。その結果、「移動の経験」が当事者の心情や言語能力観、意味世界に影響していることがわかった。このことから日本語教育の教育方法や教材開発においても、「移動する子ども」の視点が必要であることが確認された。

研究成果の概要（英文）：This study explores how chidlren who were born and raised up in multilingual environments outside Japan have been living and how they think about their plurilingual and pluricultural competences through the intensive interviews on their life.Several interview researches were conducted in Thailand and Germany. The collected data on their life stories was analyzed by the analitical concept, Children Crossing Borders which focuses on the core of which one's experiences and memories are shaped by geographical mobility, linguistic mobility and language-education category mobility. As a result, experiences of their move in their life trajectories have been deeply influencing their langauage awareness and life strategies. It means that the viewpoint of Children Crossing Borders is indespensable in developing teaching material development of Japanese language.

研究分野：日本語教育

キーワード：移動する子ども　継承日本語教育　ことばの力　複言語複文化能力　移動とことば　複数言語環境　ライフストーリー　年少者日本語教育

１．研究開始当初の背景

⑴日本国外において、幼少期より複数言語環境で日本語を学ぶ子どもが増加しており、その子どもを対象にした日本語教育の方法や教材が大きな課題となっている。本研究は、そのような世界的な状況を踏まえて、子どもたちの複数言語生活の現状の把握と新たな教育方法の構築が必要と考え、構想された。

⑵このテーマは、日本国内で日本語を学ぶ子ども（たとえば、「日本語指導が必要な児童生徒」）の日本語教育にも関連する。つまり、日本国内外の年少者日本語教育の共通テーマになるゆえに、幼少期より複数言語環境で成長する子どもの実態を全人的に把握することは喫緊の課題と考えられる。

２．研究の目的

⑴本研究は、日本国外において、幼少期より複数言語環境で日本語を学ぶ子どもたちがどのように成長し、日本語能力を含む複言語複文化能力を当事者はどのように考えているのかを把握する。

⑵その調査結果を踏まえ、幼少期より複数言語環境で日本語を学ぶ子どもたちのことばの教育方法と教材開発のあり方を検討し、これらの子どもたちを対象にした新たな日本語教育のあり方を提案することを目的と している。

３．研究の方法

⑴日本国外において、幼少期より複数言語環境で日本語を学ぶ子どもたちの現状を調査するともに、幼少期より複数言語環境で成長した体験を持つ大人が自らの複言語複文化能力をどのように捉えるか、またその体験をどのように意味づけ、経験として記憶し、生きているのかについて調査をした。

⑵この調査は、全人的視点で、またライフコース全体の中で個人の認識を調査するため、対面による半構造化インタビュー調査とした。調査は、非英語圏において、日本人家族あるいは国際結婚家族で成長した人を調査協力者として、タイとドイツで行った。それらの調査で集められたデータを、「移動する子ども」という分析概念で分析し、その結果を教育へ生かす方法について検討した。

４．研究成果

⑴この調査によって得られたデータは、「移動する子ども」の分析概念の３観点、1、空間移動、2、言語間移動、3、言語教育カテゴリー間移動から分析を行った。その結果、幼少期より親によって成育された環境がこれらの３観点によって分析されると同時に、調査協力者の心情や経験、意味世界が分析された。

その結果わかったことは、以下の通りである。これまでも文化人類学や社会学では「移動が常態である」という視点に立って世界を捉える研究があった。それらの研究はいずれも移動を前提とし、移動から人や社会を捉える研究といえる。しかし、それらの研究では物理的な移動が議論の中心にあるが、本研究が提起する以下の３点について十分な言及がない。その第一は、本研究で検討したような幼少期より複数言語環境で成長する人に見られる言語接触、言語意識、複数言語とアイデンティティに関する意識やその動態性について言及がない点である。たとえば、ドイツ人の父と日本人の母のもとドイツで生まれた子どもの場合、成長過程には、主にドイツ語、日本語、英語に対する意識や向き合い方の変化、また、そのことが進路やキャリア、アイデンティティ形成の変容に影響していた様子が見られた。したがって、本研究は、社会学がいう「モバイル・ライブズ」に生きる個にとって「ことばの視点」は欠かせず、「移動とことば」の視点からの研究が不可欠であることを示唆する。

第二は、幼少期より複数言語環境で成長する人は移動によって接触する複数言語を媒介にして社会認識を形成して行くという点である。社会学者のゲオルグ・ジンメル（G. Simmel）は社会とはそれを構成する諸要素の「相互作用」によって成立すると捉え、中でも社会を考える上で個人の「心的相互作用」「主観的文化」に注目した。つまり、個人のもつ主観的な社会認識あるいは世界認識が重要な働きをするという指摘だ（ジンメル、1994）。その影響を受けた現象学的社会学者のアルフレッド・シュッツは、集団の外部から来る人は「接近集団に関する知識は等高線で描く地図のように、いくつもの層によって形成される」と述べた。そのように考えると、複数言語環境で成長する人は日常的に複数言語を媒介としたコミュニケーションを経験するたびに複数の「等高線で描く地図」が形成され、それらを通じて自らの中に動態的な社会認識と自己認識が形成されると考えられる。タイ人の父と日本人の母のもとタイで生まれたＢさんは就職場面で「日本語のできるタイ人」と自己表象したり、ドイツで生まれた子どもが「自分は日本人の話す日本語を話したいとか、日本人の話すべき日本語で勤務したいという気持ちが自然に出てくる」と語ったりするのは、社会を構成する諸要素の相互作用により形成される社会認識の例である。その結果、「移動する子ども」という経験と記憶が動態的に形成されていく。そ

の意味でも、幼少期より複数言語環境で成長する人の研究には、複数言語使用の視点が欠かせないのである。

さらに第三は、ドイツで生まれた子どもがその身体的特徴や言語使用によって他者から「トルコ人」「パレスチナ人」「ドイツと日本のハーフ」などとみなされたことや、「日本人らしい日本語」という社会的規範意識と対峙しながら自らの生き方や言語使用、アイデンティティ、位置どりを模索していく姿を語っていた点である。つまり、ドイツで生まれた子どもの語りは、移動の中で生きる当事者の主観的意味世界は個にとって重要なテーマであることを示している。その主観的意味世界は、同時に、個の「感情」「感覚」「情念」の世界があり、その世界は他者や社会と相互作用的関係にあるという点が重要である。それは知識社会学のいう、個が理解する社会的認識と自らの複合的な社会的認識の「弁証法的現実理解」（バーガー＆ルックマン、2003）である。したがって、「移動する子ども」という経験と記憶を抱え、自らの生にどう向き合って生きていくのかという課題は社会の中の自己のあり方の研究であると同時に、これからの社会のあり方を研究することになる。

以上のように「移動する子ども」の研究は、移動を常態とする 21 世紀の人の生き方、社会のあり方を考える上で極めて重要な研究領域であり、社会的テーマであるといえるだろう。特に、個の個別性、動態性、複合性というポストモダンな視点から幼少期より複数言語環境で成長する人の主観的意味世界を探究する「移動する子ども」研究は、新たな人の研究、新たな教育の研究へ導くであろう。

⑵以上の成果から日本語教育の教材開発においても、「移動する子ども」の視点に立った教育方法の検討が必要である。それは単に日本語の語彙や文法を効率的に習得させる方法ではなく、子どもが学習主体として複数言語のひとつとして日本語に向き合い、自分にとって意味の ある言語として日本語を学ぶ実感を体験できる日本語教育である。

本研究がめざす日本語教育はかつてKramsch(1998)が言った「第三の場所(the third place)」を探求する言語教育でもあるが、認知発達段階に応じた知的探求のできる教材を使い、子どもが他者との協働学習を通じて「考える力」や「生きる力」を獲得できるような日本語教育を提案することが重要であると考える。

⑶「日本語を学ぶ子ども」の複言語複文化能力の現れ方を実践者がどのようにとらえたかについての情報を収集し、それらをもとに複言語複文化能力の現れ方にもとづく「見立ての束」すなわち「グローバル・バンドスケール」の開発とその使用による教育実践を蓄積することが今後の課題となろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

①川上郁雄「「移動する子ども」をめぐる研究主題とは何か ― 複数言語環境で成長する子どもと親の記憶と語りから」『ジャーナル「移動する子どもたち」−ことばの教育を創発する』査読有，8，2017、1-19 http://www.gsjal.jp/childforum/journal.html

②川上郁雄「「移動する子ども」という記憶に親子はどう向き合うのか-幼少期より複数言語環境で成長した大学生とその親の語り」『ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（2015）報告・発表論文集』査読有、126-131、2016

③川上郁雄「移動する子ども」駒井洋監修・佐々木てる編『マルチ・エスニック・ジャパニーズ-○○系日本人の変革力』明石書店、86-89、2016

④　川上郁雄「「ことばの力」とは何かという課題」『日本語学』、明治書院、10 月号、56-64、2015

〔学会発表〕（計　５件）

①2015年ヨーロッパ日本語教育学会(フランス・ボルドー大学、2015年8月27日~ 2015年8月29日)

②2016社会言語科学学会（京都外国語大学、2016年09月03日~ 2016年09月04日）

③２016日本語教育国際研究大会(国際学会：インドネシア・バリ、2016年09月09日~ 2016年09月10日)

④Japan in Australia International Conference (招待講演、国際学会：University of Queensland, Australia、2016年11月24日~ 2016年11月26日)

⑤ヨーロッパ日本語教育学会（国際学会：新リスボン大学、2017年8月30日~ 2017年9月2日）

〔図書〕（計　１件）

川上郁雄編『公共日本語教育学−社会をつくる日本語教育』全 221 頁、くろしお出版、2017

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川上郁雄（Kawakami,Ikuo）早稲田大学・国際学術院（日本語教育研究科）・教授
（　１　）

研究者番号：30250864

(2)研究分担者
（　０　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　０　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　０　）